

時記せる處なるが、畫伯の筆が社會に迎へられしは、其落葉以來の事にして、其の以前にも賢首菩薩其の他傑作尠からざりしも、病身なりし上に多年眼病を患ひたれば、筆執る事も多からず、且つ亂作を避け、如何なる小品と雖も之れを研究的に物されしかば、他の畫家に比して作品少く、従つて遺産とてもなく、遺子の教育も充分ならざるより、今回岡倉覺三、玉堂、大觀、廣業、觀山、臨風の諸氏等發起となり、來四月二日より向ふ一週間、本校構内に於て追悼展覽會を開催して遺墨を陳列し、且つ有志より寄贈の金屏風五双に現代諸大家揮毫し、其他各畫家の寄附畫をも賣却し、出陳の遺墨を寫眞版となして一部の畫帖となし、之れを有志に頒ち、其の上り高を以て遺子の教育費に充つる筈なりと。今の世に於て此の美學を見る、洵に喜ばしき事なり。而して遺墨展覽會事務所は本校文庫内に設けられ、出陳せんとする向は二月中に申出づべき定めなりといふ。

(同第十卷第五号)

外に同誌第十卷第八号(同年五月)には前出「なにはばら」の本展覽會に関する論評も掲載されている。岡倉覺三らが発行した『春草画集』によれば、本校は「魚類」(写生成績)、「寡婦と孤児」(卒業制作)および「水鏡」を出品したことがわかる。

⑦ 青木繁遺作展覽會

明治四十五年三月十五日より同月三十一日まで上野公園竹之台陳列館で美術新報主催第三回美術展覽會が開催され、会場の一隅に青

木繁の遺作五十一点が陳列された。

青木は明治三十七年本校西洋画科卒業。在学中、三十六年九月開催の白馬會第八回展に「黄泉比良坂」(東京芸術大学蔵)ほか十数点を出品し、その神話などに題材をとった独自の浪漫主義的作風は画界に大きな波紋を投げかけ、白馬賞第一回受賞者となった。卒業した年の秋には「海の幸」を白馬會第九回展に出品。明治四十年の東京勸業博覧會には「わだつみのいろこの宮」を出品したが、同年夏には郷里久留米に帰り、貧窮と落魄の放浪生活の中で四十四年三月二十五日、数え三十歳の若さで病死した。遺作展はその一周忌にあたって友人たちが開催したもので、出陳作は大正二年政教社発行『青木繁画集』に多少作品を追加して収められた。同書はほかに青木の歌稿、書簡、画談および友人たちによる「追悼と感想」(坂本繁二郎、森田恒友、高村真夫、正宗得三郎、有島生馬、木下柰太郎、岩野泡鳴、蒲原有明、梅野満雄)、年譜が収録されており、青木繁研究に不可欠の資料となっている。

青木繁が日本近代絵画史上に輝かしい地位を占めるのはずっと後になってからである。死去および遺作展開催の際には友人たちの書いたものが新聞や雑誌に載ったが、世間一般の評価は決して高いとは言えなかった。本校の校友会月報などは、その死去に際してわずか数行の記事を載せただけで、遺作展については全くノーマコメントであって、その扱いは前記菱田春草の場合と極めて対照的であった。

⑧ 高勾麗時代古噴の壁画模写